

宮沢賢治 「銀河鉄道の夜」考

—「ジヨバンニの切符」から—

白 神 早紀子

一 はじめに

1. 作品解説

「銀河鉄道の夜」は宮沢賢治の童話作品である。孤独な少年ジヨバンニが、友人カムパネルラとともに、幻想宇宙の鉄道を走る列車に乗り旅をする物語である。

一九二二ごろ（賢治二七歳）初稿が執筆されはじめたが、一九三三年（賢治三七歳）の宮沢賢治の死まで推敲がおこなわれ、草稿の形で遺された。『校本宮沢賢治全集』によって、一次稿から四次稿まで三回に亘り改稿が行われたことが明らかになっている。（※1）

一〜三次稿と四次稿との間には内容に大きな差異がある。学校の授業や活版所の場合、友人カムパネルラが川

で行方不明になる挿話などは四次稿で追加されたものである。また、三次稿までは銀河鉄道の旅はブルカニ口博士の実験によりジヨバンニが見た夢だったとされていたが、四次稿では博士は登場しない。

なお、このレポートでは四次稿を完成形と考え、『新』校本宮沢賢治全集 第十一巻 童話IV 本文篇』をテキストとする。

また、本文からの引用はへ、論文等からの引用と筆者による強調は「」で表す。

2. 作品の構造

幻想世界	現実
<p>宇宙空間</p> <p>七、北十字とブリオシン海岸</p> <p>八、鳥を捕る人</p> <p>九、ジョバンニの切符</p> <p>・ 車掌がやってきて、乗客の切符の車内改札を行う。 ・ 青年と女の子とその弟が列車に乗ってくる。 ・ 女の子が「蠍の火」の話をする。</p>	<p>学校</p> <p>活版所 テルハイト先</p> <p>ジョバンニの家</p> <p>丘 町 丘 町</p> <p>一、午後の授業</p> <p>・ 天体についての授業。ジョバンニは先生に質問をされるが、仕事による疲れと寝不足のため、問題に答えられない。次にあてられたカムパネラもジョバンニに気を使って答えない。</p> <p>二、活版所</p> <p>・ 大人たちに「よう、虫めがね君、お早う。」とからかわれる。 ・ 「小さな銀貨」一つを貰い、母親のためパンと角砂糖を買う。</p> <p>三、家</p> <p>・ 漁に出たまま帰って来ない父親のことや、カムパネラとの思い出について母親と会話する。 ・ 病気の母親のために、牛乳をもらいに出掛ける。</p> <p>四、ケンタウル祭の夜</p> <p>・ 楽しそうな人々と孤独なジョバンニが対比される。 ・ 偶然出会ったザネリに父親のことでからかわれる。 ・ 牛舎に行くが、牛乳が無いので、しばらく待つように言われる。町へ戻ると、再びザネリとクラスメイトたちに出会い、父親のことでからかわれる。その中にいたカムパネラは、△気の毒さうに、だまって少しわらって△ジョバンニを見ている。ジョバンニは△なんと云へずさびしくなつて△丘の上へ走っていく。</p> <p>五、天気輪の柱</p> <p>・ ジョバンニは丘の上に寝転がり、星空をながめる。</p> <p>六、銀河ステーション</p> <p>・ △気がついてみると、さっきから、ごとごとごとごと、ジョバンニの乗ってある小さな列車が走りつつけてゐたのでした△</p> <p>・ 気がつくとジョバンニの前の席にカムパネラが座っている。</p>

現 実	
丘 河原 (街) (ジョバンニの家)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ジョバンニは目を覚まし、もとの丘に寝転がっている。 ・再び牛舎に行き、牛乳を手に入れる。 ・丘から下りて、河原に人だかりを見つめる。 ・偶然出会った同級生のマルソに、カムパネラがザネリを助けるために川にとびこみ、流されたことを聞く。 ・カムパネラの父へ「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」 ・カムパネラの父はジョバンニに彼の父親が帰ってくることを教える。 ・「ジョバンニはもういろいろなことで胸がいっぱいでなんにも云へず博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行ってお父さんの帰ることを知らせやうと思ふともう一目散に河原を街の方へ走りました。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・ジョバンニと女の子は神様について議論する。三人が列車から降りていく。 ・ジョバンニへ「カムパネラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行かう。僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない。」 ・カムパネラへ「(省略) あすこがほんたうの天上なんだ。あつあすこにゐるのぼくの母さんだよ。」 ・カムパネラが突然消える。

3、研究の目的と方法

「2、作品の構造」にあるように、車掌が車内改札を行う場面以降の章は「九、ジョバンニの切符」と題されており、ジョバンニの切符が物語上重要なアイテムであると考えられる。(実際の原稿では、「九」という文字は書かれておらず、それ以降章分けもされていない(※2)ことから、章題ではなくメモ書きなのではないかとも受け取れるが、いずれにせよ物語上重要なアイテムであるだろう。)

作中でジョバンニは、へどこまででも行ける、不思議な切符を与えられている。「銀河鉄道の夜」は多くの謎が秘められている作品だが、ジョバンニの切符もその謎のひとつである。

このレポートでは、「ジョバンニの切符とはどういうものなのか」「なぜジョバンニがへどこまででも行ける、特別な切符を与えられたのか」を考察し、そこから「銀河鉄道の夜」とは何なのかを考えていきたい。

二 作品から

1、「ジョバンニの切符」とその謎

まず、ジョバンニの切符が出現する場面を引用する。

「切符を拜見いたします。」三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまつすぐに立ってゐて云ひました。鳥捕りは、だまつてかくしから、小さな紙きれを出しました。車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、（あなた方のは？）といふやうに、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

「さあ、」ジョバンニは困つて、もちもちしてゐましたら、カムパネラは、わけもないといふ風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあはててしまつて、もしか上着のポケットにでも、入つてゐたかと思ひながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入つてゐたらうかと思つて、急いで出してみましたら、「」それは四つに折つたはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出してゐるもんですから何でも構はない、やつちまえと思つて

渡しましたら、車掌はまつすぐに立ち直つて叮嚀にそれを開いて見てゐました。そして読みながら上着のぼたんやなんかしきりに直したりしてゐましたし、燈台看守も下からそれを熱心にのぞいてゐましたから、ジョバンニはたしかにそれは証明書か何かだつたと考へて少し胸が熱くなるやうな気がしました。

次に、カムパネラとジョバンニの切符について、それぞれ本文に即してまとめました。

①カンパネラの切符

〈小さな鼠いろの切符〉

②ジョバンニの切符

a 上着のポケットにいつのまにか入つていた。

b 四つに折つたはがきぐらゐの大きさの緑いろの紙

c へいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの

d だまつて見てゐると何だかその中へ吸い込まれてしまふやうな気がする

e へほんたうの天上へさへ行ける切符

f へ天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券

g へ不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまで

も行ける」

ジョバンニの切符はcへいちめん黒い唐草のやうな模様の中に、おかしな十ばかりの字を印刷したもの」という一文から、以前は仏教の曼荼羅のやうなものではないかという説が一般的であった。しかし、入沢康夫、天沢退二郎両氏によつて、フランスの詩人であるマラルメの『音楽と文芸』のなかの一文「それらを結び合わせている唐草文様の全体には、それを認めるなり私たちが急に目がくらみ、総毛立つといったところがあり、また、いても立つてもおれないやうな不安な台致感があります」(※3)に酷似しているという指摘がされている。(※4)

切符の効力については、eへほんたうの天上へさへ行ける切符、fへ天上どこぢやない、どこでも勝手にあるける通行券、gへ不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんか、どこまででも行ける」といったように、「どんなところまでも行ける」切符であることが強調されている。

車掌の切符を熱心に読む様子や、鳥捕りの反応からも、ジョバンニのへどこまででも行ける」切符は特別なものだと考えられる。

では、なぜ、ジョバンニはこのやうな「特別な切符」を与えられたのだろうか。

2、作品から読み取れるジョバンニの精神的变化

「特別な切符」が与えられた主人公ジョバンニについて考察したい。

ジョバンニは、病気の母親のためにアルバイトをし、家計を支え、尽くしている。その半面、自分をいじめてくるクラスメイトのザネリについては、へ走るときはまるで鼠のやうななくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云ふのはザネリがばかなからだ。」と短絡的に考えていたり、「自分とカムパネラの世界」を壊す他人(鳥捕り、かほる子)に対しては敵意を持ったりといったやうに、利己的な一面も持っていた。

しかし、銀河鉄道の旅での、「①鳥捕り」「②かほる子たち」との交流を通して、ジョバンニは精神的变化を遂げている。

それでは、該当する場面を本文から抜き出し、考察していく。

①鳥捕りとの交流

鳥捕りは、鷺などの鳥をつかまえて売っている商売人の男である。銀河鉄道の旅の途中で列車に乗ってきて、

ジヨバンニたちに話しかけてくる。

A (一四三頁)

「え、いゝんです。」ジヨバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに微笑ひながら、荷物をゆっくり網棚にのせました。ジヨバンニは、なにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気がして、だまって正面の時計を見てゐましたら、ずうつと前の方で、硝子の笛のやうなものが鳴りました。

B (一四六頁)

(「なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。」) チョコレートよりも、もつとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるもんか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。けれどもぼくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべてゐるのは、大へん気の毒だ。)

C (一五〇頁)

ジヨバンニはなんだかわけもわからずにはかにとりの鳥捕りが気の毒でたまらなくなりました。鷺をつかまへてせいせいしたとよろこんだり、白いき

れでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびつくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり、そんなことを一一考へてゐると、もうその見ず知らずの鳥捕りのために、ジヨバンニの持つてゐるものでも食べるものでもなんでもやつてしまひたい、もうこの人のほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つゞけて立つて鳥をとつてやつてもいゝといふやうな気がして、どうしてももう黙つてゐられなくなりました。ほんたうにあなたのほしいものは一体何ですか、訊かうとして

D (一五一頁)

「どこへ行つたらう。一体どこでまたあふのだらう。僕はどうしても少しあの人に物を言はなかつたらう。」あゝ、僕もさう思つてゐるよ。「僕はあの人

が邪魔なやうな気がしたんだ。だから僕は

大へんつらい。」ジヨバンニはこんな変てこな気もち

は、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云つたこともないと思ひました。

まずAで、ジヨバンニは鳥捕りが列車に乗りこみ自分たちの席に座つてきたとき、へなにか大へんさびしいやうなかなしいやうな気がしてゐる。

そしてその後のBでジョバンニは鳥捕りをバカにしている。しかし、Cで「鷲をつかまえてせいせいしたとよろこんだり、白いきれでそれをくるくる包んだり、ひとの切符をびっくりしたやうに横目で見てあはてゝほめだしたり」している鳥捕りの様子を見て「気の毒」に思うようになり、「ほんたうの幸になるなら自分があの光る天の川の河原に立つて百年つづけて立つて鳥をとってやってもいゝ」という心境に至っている。

そしてそれをDで「こんな変てこな気もちは、ほんたうにはじめてだし、こんなこと今まで云ったこともない」と感じている。

鳥捕りの行動はいかにも世俗的な商人のよう描かれている。ジョバンニは、その世俗的な人々の象徴であるような鳥捕りに対して最初は嫌悪感をもっていた。しかし、次第にあわれみを感じるようになり、最後には「ほんたうの幸」を探してやりたいとまで考えている。このように、鳥捕りとの交流によって、ジョバンニは利他（※5）的精神に目覚めている。鳥捕りとの交流には、ジョバンニの精神的な変化が見られる。

②青年・姉（かほる子）・弟との交流

鳥捕りが消えてから、列車には青年と姉（かほる子）

弟（タダシ）が乗り込んでくる。彼らはタイタニック号沈没事件をモデルとした海難事故によって命を落とし、列車に乗ってきたという設定である。（※6）「他の人を押しつけて救助用ボートに乗るよりも、船と一緒に沈んでいこう」と考えた上での、自己犠牲的な死を遂げている。

A（一五七頁）

「さうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」カムパネルラがかほる子に云ひました。「えゝ、三十足くらゐはたしかに居たわ。ハーブのやうに聞えたのはみんな孔雀よ。」「女の子が答へました。ジョバンニは俄かに何とも云へずかなしい気がして思はず「カムパネルラ、こゝからはねおりて遊んで行かうよ。」とこわい顔をして云はうとしたくらゐでした。

B（一五八頁）

「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだいに思ひながらだまって口をむすんでそらを見あげておました。

C (一五八頁)

(どうして僕はこんなにかなしのだらう。僕はもつとこゝろもちをきれいに大きくもたなければいけない。(中略) カンパネルラだってあんな女の子とおもしろさうに談してゐるし僕はほんたうにつらいなあ。)

D (一五九頁)

(こんなしづかないゝとこで僕はどうしてもつと愉快になれないだらう。どうしてこんなにひとりさびしいのだらう。けれどもカムパネルラなんかあんなまりひどい、僕といっしょに汽車に乗ってゐながらまるであんな女の子とばかり談してゐるんだもの。僕はほんたうにつらい。)

E (一六五頁)

ジヨバンニがこらえ兼ねて云ひました。「僕たちと一緒に乗つて行かう。僕たちどこまでだつて行ける切符持つてるんだ。」「だけどあたしたちもうこゝで降りなけあいけないのよ。こゝ天上へ行くところなんだから。」女の子がさびしさうに云ひました。

F (一六六頁)

「ぢやさよなら。」女の子がふりかへつて二人に云ひました。「さよなら。」ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらへて怒つたやうにぶつきり棒に云ひました。

「蠍の火の話」(一六三頁) (むかしバルドラの野原に一匹の蠍がいて小さな虫などを食べて生きていた。ある日いたちに見つかつて逃げ、井戸に落ちてしまった蠍は、自分はたぐさんの虫を殺して生きてきたのだから、いたちに自分の命を与えてやればよかつたと後悔する。蠍は神さまに、みんなの幸のために私のからだをおつかいくださいと話す。そして蠍は真つ赤なうつくしい火になつて空にのぼつて、今でも夜の闇を照らしている。)

三人が登場し、かほる子とカムパネルラが話しているときも、ジヨバンニはまずAで〈かなし〉気持ちになつている。鳥捕りが登場したときも、ジヨバンニは最初に〈かなし〉気持ちになつており、カムパネルラとの二人の世界を邪魔されたことに対しての悲しさなのではないかと考えられる。その後かほる子に対しては嫌悪感をもつており、Bでは〈生意気ないやだ〉と感じている。しかし、かほる子から、闇夜を照らすため体を燃やし続けていた蠍の話(※7)を聞かされたことにより、ジヨバンニの態度は変わる。Eではジヨバンニはかほる子た

ちに「僕たちと一緒に乗って行かう」と言って自分から誘い、また、Fではかほる子たちとの別れを悲しく思い「泣き出したいのをこらえて」いる。ここでの蠅の話は、前述したカムパネルラが消える直前の「僕はもうあのさそりのやうにほんたうにみんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまはない」という決意の台詞につながっている。

このように、利己的な一面をもっていたジョバンニが、鳥捕りやかほるたちとの交流を経て、「みんなの幸のためならば僕の中からだなんか百べん灼いてもかまわない」というきわめて利他的な思想にいきついていることがわかる。

そしてジョバンニは、「すべての生き物の幸福をどこまでも探しに行く」という心境に到達している。

3、カムパネルラの切符と比較して

ジョバンニが特別な切符をもっていたのに対して、カムパネルラは「小さな鼠いろの切符」をもっていただけである。「銀河鉄道の夜」には、難破事故で死んだかほる子たち、蠅の火の話、カムパネルラの水死といったように、「自己犠牲による死」というテーマが繰り返し登場する。これは「よだかの星」(※8)「グスコープドリ

の伝記」(※9)など、宮沢賢治の他の作品にも見られるテーマである。

では、なぜ、ザネリを助けるために溺死したカムパネルラの切符は、ジョバンニのように特別な切符ではなかったのだろうか。

その点について、『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』の中で、天沢・入沢両氏によつて「結局、自己犠牲というのは至高善ではないということを賢治はいろいろと強調している。(中略)だから求道者としてのジョバンニが大切な切符を持つということは当然なわけだ」と指摘されている(※10)が、ここでは本文から読みとれる二人の精神性の違いを考察する。

かほる子たちと別れた直後のジョバンニとカムパネルラの会話を引用する。

カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでおもしろい。けれどもほんたうのさいはひは一体何だらう。」
ジョバンニが云ひました。「僕わからない。」カムパネルラがぼんやり云ひました。

このように、銀河鉄道の旅のなかで、鳥捕りやかほる子たちとの交流を通して、「みんな」の「ほんたうの幸」

をさがす決意をしたジョバンニの呼びかけ対して、カムパネルラは本当の幸について「僕わからない。」と「ほんやり」答えるだけである。

次に、カムパネルラが消える直前のふたりの会話を引用する。

「僕もうあんな大きな暗の中だつてこわくない。きつとみんなのほんたうのさいはいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に進んで行かう。」
「あゝきつと行くよ。あゝ、あすこの野原はなんてきれいだらう。みんな集つてるねえ。あすこがほんたうの天上なんだ。あゝあすこにゐるのぼくのお母さんだよ。」

ここでも、固く決意を固めているジョバンニに対して、カムパネルラは上の空の様子で、ふたりの会話にすれ違ひが見られる。

そして、列車の中でのカムパネルラの台詞に次のようなものがある。

「ぼくはおつかさんが、ほんたうに幸になるなら、どんなことでもする。けれどもいったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだらう。」(中略)

「ぼくわからない。けれども、誰だつて、ほんたうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おつかさんは、ぼくをゆるして下さると思う。」

このように、カムパネルラはあくまで母親一人の幸福を追求したいと考えている。そして、本当の幸せについては「わからない」と思考停止している。

死者であるカムパネルラと異なり、ジョバンニはこれから現世で「みんな」の「ほんたうの幸」を探さなければならぬ。そのために、ジョバンニは「ほんたうの天上へさへ行ける」どこでも勝手にあるける」という、「特別な切符」を与えられて、現実世界に戻ってきたと考えられる。

「銀河鉄道の夜」では、「現世で「みんな」の「幸福」を「さがしに行く」こと」が、何よりも重大な使命である、という思想が示されているのではないだろうか。

三 作品の背景・思想から

1、一次稿～三次稿より

一次稿から三次稿までの「銀河鉄道の夜」は、四次稿と比較して切符についての記述が多く、切符についての説明が見られる。また、その変遷も知ることができる。ここでは、一次稿から三次稿までの切符についての記述を抜き出し、考察したい。

次の引用は、列車で、車掌が乗客の切符を検札している場面である。

「さあ、」ジョバンニは困ってカムパネルラの眼を見ました。カムパネルラもちもぢしてたしかに持つてゐないやうでした。(あゝ、「事」によつたら僕が二人のを持つてゐたかも知れない。)と思ひながらジョバンニが上着のかくしに手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。(二次稿)

「さあ、」ジョバンニは困って、もちもぢしてゐましたら、カムパネルラは、わけもないといふ風で、小さな嵐いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっ

かりあはせてしまつて、もしか上着のポケットにも、入つてゐたかとおもひながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。(三次稿・四次稿)

このように、二次稿においてジョバンニはカムパネルラと兼用の特別な切符を与えられていた。しかし、三次稿が書かれる過程でジョバンニとカムパネルラが別々の切符を持つようになり書き換えられている。賢治が意識してジョバンニとカムパネルラに異なる切符を持たせたことがわかる。

当初はカムパネルラもジョバンニも「特別な切符」の保持者である資格をもっていた。つまり、「自己犠牲による死」が「みんなの幸福を追求する生」と等価であった。

しかし、二次稿から三次稿の執筆過程で賢治の心境が変化し、「みんなの幸福を追求する生」を選んだジョバンニのみに「特別な切符」が与えられた、と推測できる。

また、一次稿～三次稿では、カムパネルラが消えてからブルカニ口博士(※11)という人物が登場し、銀河鉄道での旅がブルカニ口博士の実験による夢だったことを話している。そして、ジョバンニに与えられた切符について説明をしている。

「あゝ、ぼくはきつとさうします。ぼくはどうしてそれをもとめたらいいでせう。」「あゝ、わたくしもそれをもとめてゐる。おまへはおまへの切符をしつかりもつておいで。そして一しんに勉強しなけあいない。おまへは化学をならつた〔ら〕う。水は酸素と水素からできてゐるといふことを知っている。いまはたれだつてそれを疑やしない。実験して見るとほんたうにさうなんだから。けれども昔はそれを水銀と塩でできてゐると云つたり、水銀と硫黄でできてゐると云つたりいろいろ議論したのだ。みんなめいめいがじぶんの神さまがほんたうの神さまだといふだらう、けれどもお互ほかの神さまを信ずる人たちのしたことも涙がこぼれるだらう。(後略)」

(中略)

「さあ、切符をしつかり持つておいで。お前はもう夢の鉄道の中でなしに本当の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない、天の川のな〔か〕でたった一つのほんたうのその切符を決しておまへはなくしてはいけない。」

(中略)

「僕きつとまっすぐに進みます。きつとほんたうの幸福を求めます。ジョバンニは力強く云ひました。

「あゝではさうなら。これはさつきの切符です。」

博士は小さく折つた緑いろの紙をジョバンニのポケットに入れました。そしてもうそのかたちは天気輪の柱の向ふに見えなくなつてゐました。ジョバンニはまっすぐに走つて丘をおりました。そしてポケットが大へん重くカチカチ鳴るのに気がつきました。林の中でまつてそれをしらべて見ましたらあの緑いろのさつき夢の中で見たあやしい天の切符の中に大きな二枚の金貨が包んでありました。(三次稿)

このように、〈ほんたうの幸福〉を探すがジョバンニの使命であり、それは〈夢の鉄道〉に限つた話ではないということが、博士によつて念押しされている。〈天の川のなかでたった一つのほんたうのその切符〉は現実世界でも有効であり、ジョバンニの求道者としての証である、ということがわかる。

四次稿においてブルカニロ博士の登場が削られると共に、切符についての具体的な説明も削られている。しかし、切符の役割については、四次稿においても同じなのではないだろうか。

三次稿までは、ジョバンニの旅はブルカニロ博士の実験による夢であり、現実世界で博士がジョバンニに切符を手渡していることから、夢の中の切符も博士によつて

与えられたものであったと推測できる。

2、法華経信仰と「銀河鉄道の夜」

では、作品に何度も登場し、ジヨバンニが決意したへほんたうの幸をさがすとは一体どういうことなのだろうか。

宮沢賢治は生前、法華経に深く帰依していた。中学を卒業した十八歳のとき（一九一四年）、初めて法華経を読み、身震いするほど感動したという。一九二一年には法華宗系在家仏教団体である国柱会に入信している。

また、賢治は自分の童話作品は法華経を広めるための媒体だとしている。「大乘仏教の真意を、ひとびとにひろめるために童話を書く」という言葉を残している。（※12）
「銀河鉄道の夜」も例外ではなく、大乘仏教の思想が取り入れられていると考えられる。

仏教における菩薩とは「悟りを求めて修行する者の意」であり、「自ら悟りを求めるのみでなく、他人を救済し、悟りに導くという利他行が強調され、自ら悟りをひろく能力があるにもかかわらずこの世に留まって、すべての衆生を彼岸に導く人を意味するようにもなった」（※13）とされている。

賢治はこの利他行こそ菩薩道と考えていたようで、「農

民芸術概論綱要」（※14）において、〈世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない〉という言葉を残している。

また、「手紙四」（※15）という妹・トシの死の体験が色濃く反映されたと思われる童話作品のなかにも、

チュンセはポーセをたづねることはむだだ。なぜならどんなこどもでも、また、はたけではたらいてゐるひとでも、汽車の中で苹果をたべてゐるひと（で）も、また歌ふ鳥や歌はない鳥、青や黒のあらゆる魚、あらゆるけものも、あらゆる虫も、みんな、むかしからのおたがひのきや「う」だいなのである。チュンセがもしもポーセをほんたうにかあいさうにおもふなら大きな勇氣を出してすべてのいきもののほんたうの幸福をさがさなければいけない。それはナムサダルマブフンダリカサストラといふものである。

という一節がある。ナムサダルマブフンダリカサストラとはサンスクリット語で「法華経に帰依します」という意味である。（※16）

三次稿「銀河鉄道の夜」における、ブルカニ口博士と

の対話場面に、これと酷似した部分があった。

「おまへのともだちがどこかへ行ったのだらう。あのひとはね、ほんたうにこんや遠くへ行ったのだ。おまへはもうカムパネラをさがしてもむだだ。」

「ああどうしてなんですか。ぼくはカムパネラといっしょにまつすぐ行かうと云ったんです。」

「あゝ、さうだ。みんながさう考える。けれどもいっしょに行けない。そしてみんながカムパネラだ。おまへがあふどんなひとでもみんな何べんもおまへといっしょに苹果をたべたり汽車に乗ったりしたのだ。だからやつぱりおまへはさつき考へたやうにあらゆるひとのいちばんの幸福をさがしみんなと一しよに早くそこに行くがいゝ、そこでばかりおまへはほんたうにカムパネラといつまでもいっしょに行けるのだ。」

「手紙五」においてチュンセがへすべてのいきものほんたうの幸福を探さなければならぬと諭されたように、「銀河鉄道の夜」ではジョバンニがブルカニ口博士に諭され、へみんなのほんたうのさいはいをさがしに行くゝと決意している。そうすることで、死者と心をもにすることができると考えられている。

〈みんなの〉〈ほんたうの幸をさがす〉ことは宮沢賢治の生涯の課題であった。そして、それが死者と心をともにすることができる唯一の方法であり、〈ナムサダルマプフンダリカサストラ〉(法華経に帰依すること)なのである。

四 まとめ

「ジョバンニの切符」について考察し、ジョバンニはみんなの〈ほんたうの幸〉を探すために、〈どこまでも〉行くことができる特別な切符を与えられたのだ、という結論に至った。ジョバンニの心理描写を追っていくと、列車の乗客たちとの触れ合いによって、「現世で求道者として生きる」という決意に到達したことが分かる。彼の切符は、求道者としての証だと言えるだろう。

そして、カムパネラの切符との比較から、二人の立場や精神性の違いによって切符が異なっているのではないかと考えた。「銀河鉄道の夜」という作品は、『みんなの幸福を追求するために生きる』ことが、最も重要な使命である」という思想を示しているのではないだろうか。

改稿については、三次稿と四次稿の差異が大きいこと

は明白だが、切符を中心に考察した場合、二次稿から三次稿にかけても作品の意味が大きく異なっていることがわかる。

また、この作品には法華経の思想が反映されており、普遍的な「少年の成長物語」であると共に、「仏教的菩薩道への、目覚めの物語」という側面もあると考えられる。だが、法華経思想が前面に押し出された三次稿と比較し、四次稿は説明的な部分ができるだけ削られた、物語性の高い作品となっている。

「銀河鉄道の夜」の原稿は、一九三三年九月二一日午後一時半、賢治が「自分で体をふき清め、眠りにつくように」永眠する際、枕元に置かれていた、とされている。

(※17)
数多くの作品を遺した宮沢賢治だが、「銀河鉄道の夜」は彼の思想・哲学・宗教観が集大成された作品であると言えるだろう。

【テキスト】

四次稿

『新』校本宮沢賢治全集 第十一巻童話「IV」本文篇

宮沢賢治（株式会社筑摩書房、一九九一年一月）

一〜三次稿

『新』校本宮沢賢治全集 第十巻童話「III」本文篇 宮

沢賢治（株式会社筑摩書房、一九九五年九月）

【注】

(※1) 岡屋昭雄『宮沢賢治論—賢治作品をどう読むか

—の第一章第五節「銀河鉄道の夜」に見るジヨパンニの死と再生」参照。

(※2) 入沢康夫、天沢退二郎『討議「銀河鉄道の夜」とは何か』の「討議I」参照。

(※3) 『世界文学大系43 マラルメ ヴェルレーラ
ンボオ』（鈴木信太郎訳）のマラルメ「音楽と文
芸」より。

(※4) (※2) に同じ。

(※5) 利他とは、「自分を犠牲にして他人に利益を与えること。」また、仏教用語で「(阿弥陀仏が)人々

に功德・利益を施して済度すること。」(『広辞苑 第五版』より)。

(※6) 宮沢賢治『新編 銀河鉄道の夜』の注一覽参照。

(※7) 蠟座のこと。「黄道上の第九星座。賢治が最も好んだ星座。夏の夕方、南点に低くS字型に輝く」

(原子朗『新 宮沢賢治語彙事典』より)。

(※8) 一九三二年頃執筆された。未発表作品。

(※9) 一九三二年、雑誌「児童文学」(文教書院)三号に発表。

(※10) (※4)に同じ。

(※11) 「ジヨバンニの夢の終わりごろ、セロのような声で、信仰と科学の一致について説く、大きな一冊の本を持った黒い帽子に青白い顔の男性もブルカニ口博士であろう」。名前の由来は諸説あるが「百科事典のブリタニカから来た」という説が一般的である。(『新 宮沢賢治語彙事典』より)。

(※12) 山田野理夫『宮沢賢治の文学と宗教』参照。

(※13) 『新 宮沢賢治語彙事典』より。

(※14) 「賢治の「農民芸術」の考えの論郭と実体の大きさを知ることができる」講義用の文章。(『新 宮沢賢治語彙辞典』より)。

(※15) 一九三三年頃執筆された。未発表作品。

(※16) 『新 宮沢賢治語彙辞典』参照。

(※17) 『宮沢賢治論—賢治作品をどう読むか—』の第一章第五節「銀河鉄道の夜」に見るジヨバンニの死と再生」より。

【参考文献一覽】

- ・石内徹篇『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』作品論集 近現代文学作品論集成⑨』(株式会社クレス出版、二〇〇一年)
- ・入沢康夫、天沢退二郎『討議『銀河鉄道の夜』とは何か』(青土社、一九七二年六月)
- ・岡屋昭雄『宮沢賢治論—賢治作品をどう読むか—』(おうふう、一九九五年二月)
- ・『広辞苑 第五版』(岩波書店、一九九八年)
- ・『世界文学大系43 マラルメ ヴェルレール ランボオ』鈴木信太郎訳(筑摩書房、一九六二年二月)
- ・日本児童文学協会『すばる児童文学研究 宮沢賢治童話の世界』(すばる書房、一九七七年三月)
- ・山田野理夫『宮沢賢治 その文学と宗教』(潮文社、一九九六年七月)